

## 現金に手を出すな（下）

七つの課をもつ部の代表課に私は転出。課長のいすに着く早々、庶務係が神妙な顔でタクシー代二百十万円の支払いが滞っているという。前部長が使った分と説明。部長には専用車があるのと言うと、家族が湯水のごとく使っていたと。平伏して仕えていた部長も部長でなくなるとこんな始末。それよりも恐ろしいことは、そのためにすでに各課に三十万円ずつ割り当ててウラ金（不正支出）を集めて支払ったことになっていたのに、前課長はネコババしていたのである（彼は後に某町町長になり汚職で失脚）。目の前のこのチンピラどももおこぼれに預かりながらの共謀にちがいない。私は絶対に払わないと断言した。

しかし、そんなことは序の口、一度ものぞいたことのない別府の最高級料亭数軒からのつけが続々とつきつけられる。何とその総額一千万円。一銭の関係もないこの金を私がどうして払えよう。彼ら前部課長らは巧妙な作戦をとった。前と新両部長が主従関係に近かったので、新部長に泣きついた。

新部長―「何とか払ってやれよ。知事一番の側近が借金して郷里へ帰ったことが表ざたになれば、一番傷つくのは知事だ。政敵はその材料探しに必死だ」。ふしぎと「責任はわしが持つ」とは言わなかった。しかし、木下知事のためなら私はやろうと決意した。結局は私はうまく乗せられていたのだ。「ウラが出来なくて役人はつとまらん」とも言われた。

ひとのしりぬぐいと思えば気も軽く、大手商社に事情をさらけ出して寄付をしてもらって決着をつける。三十年たった今思うても、わが主張を貫きえなかった臆病さが無念でならない。不正を働いた背任の罪意識もさることながら。あれは絶対支払うべきでなかった。わが生涯最高最大の恥辱であり、汚濁である。県庁のよき後輩よ、君たちはわが為したこの過ちをくり返すな。私は頭を深く垂れてここに告白する。

(一九八九年十二月四日)